淡路
橋弁慶
護法
放下僧
鐘引

九

淡路

次第

治まる国の始めとや淡路の
神代成らん　抑是は当今に仕へ
奉る臣下也扨も我宿願の子細あ
るにより住吉玉津島に参詣仕りて候
又能次なれば是より淡路の国
に渡り神代の古跡をも一見せばや

ともなは紀の海や波吹上のうら
風みつく跡をとめし淡島津舟塩
路程なく移りきつらくがそに霞し
隔りけや淡路方みも急ぎまりく

詞
急ほ程に是ハはや淡路の国に着て
此浦の人を待神代の古跡を尋
ばやとぞんじ候 神の代の跡を訪

して海山の長閑に波の淡路かくれ
種を治めしは今ハ苗代水も
豊あり 其陰陽の神代より
今人界に到るまで。山河草木
国土は皆。神の恵に作り田のあ
ぜはちらぬをうるはして千里
万里の外迄も皆当のしめは

時とかや此しも今は長閑なる
御代の池のいひくさ雲のき
しきを掻くは雲の田を人は
住みて秋きたゞ花は心の
あてなるかりのひく〳〵苗代
の水は心苦種まきてうちまい宮
とや梅田の雪そふりしき

さりかく物は是成翁は春
ねへなるありだとの風情を
たるは御田をみつまつり水口は
見てぐつくしく誠に信心の
乱毛ありがや猶是は御神田
みるかなは是は春の田を作らん
とていざ給へ結ひのとの殿は

あの名はいぐしとて又十乃名ん
てぐらをさゝく神を祭まゐらせ
いある寄に谷水をせく水口に
いぐしをさゝく苗代小田乃種まきさ
まきり出上は御田は當社二の
宮乃御供田なりく御前稲に御
供内外清浄にて御田を作り

ゆよ住吉社二乃宮まうく御
ますハ當乃一家はいつくまうく御
あら我や吾ゆづりもの乃権現にて
御前の外遷宮 跡を居ありかり
く御在の御わりる當社は二乃
家まで主の職ハとて當中一
二乃次第にあら次ゆえ 御覧有

両社のかんざし二柱の社の御殿なれハ
鶺鴒の宮居と呉伊みらく二の文字
何ぞ他んなりしとハ則伊弉諾伊
弉冊の尊二柱の神代のむかし
こゝやかしこ淡路の国を作りは一
ことに宮居ハ二の宮とあがめ
申也 然く実ハ有りしやかくらん

国土の種をさづけまつり変化の恩徳
只此神の擁護よりぞ 更新却
此混沌未分の国土世界や万物の出生あ
まねき此神徳只是両社の擁護也
就中是ハまさしく天地のいざなき
とつぎてハあなうれしをとこよいざ
まことにいてハあなをとめを是

自前乃御契ひし君よ神代ハちろらん今日あふも御覧せよ種をまきし種を納めて苗代のうく水うらくるく雲雨の跡よりまろうみまさて出去も秀る子星河よ流ごころの紬る縁の秋よおるなるハ種を納めん神徳

蔵有難の契ひかれこうへの神のちかひ座ま捨く御社の神秘悠よ御おうろへ夫天地開闢の首よりあんもん天照もうやくうまて清く明のあかる八天となり ちとく濁る八地となまり 経ま八天み五行の神御しまし八ぶ木火土金水是

なり陰よ陰陽あひ剖きらく次
去の情いさぎよきことあり金水の情
あらうこまりていけなきこと多かる
經己九いまり世界なりさりし先
をいけなきといひ出去治まり第
物出生する所をいけなきことを尸は
則此淺治の玉をたち初めと號りやぞ記

そみや二柱の神のおのごろ嶋と
申も此一嶋のうみかとより此嶋始
めて大八嶋有玉をはくわの國
伊弉諾尊日向并叙四門の海岸
を作り出給ひ日神月神蛭子そは
のをとりては地神五代の始めなり
皆此嶋より出現ぐ中も皇孫は日

向乃玉は天降りあひて地神第四
乃ほどでまれは子をはじめ生実葺経
う代くとらや天下をおさまり給
事すべて八十三万六千八百余歳
じうは目出度王子達みな代々とし
ほり塚乃檜現じ給ひは万代
おもおいさかえの神代をも只今の

生出なべて宝神乃代の道直くうつく
べうも妙なか秋津洲の君なれば影も右
かしきは影ぞと夕日かげさす雲
乃端なかおひくあまの浮橋の古へ
をあぢかへしてはまま人をあまくさかえん
そくも浮橋のいふへどやくいかなか
玄の塚乃 其神奇は鳥羽玉乃我

黒髪も　乱れぬ結び定めんと
よの一手松の葉の手まきの神九
しるしにこれはあらくも淡路山とうちきく
そして天の岩戸を明り失はきかりく
実ことても神の世まつくら来は
あらうまりけりとへい虚空よ
左神楽の月よ光へて光さん気

色そてはらくありけるやまさとこにけり
らうまりけるこいつる人のことよ
結せる白玉の波もてゆへは淡路島
月きの光も長宝ある縁の空もす
足渡るあまの浮橋をよみまく八
島の出を求めえいさまへの神
とや秋のまた　治まる御代や出常立尊

始めよりうひぢの神の代々
内にも弟ハ今の君の代より 和光同塵
猿神の技来の国の風ハ吹之
山ハ動き 宮有りつきハ揺ぎ
ぐい 杵天の浮橋の其ハ出づ次
さるまではいかゞあらん ぬり
仏げし絆の事すたり家まりて
鵜ど上まりし代漢路よと心つき
家そ浮橋の下まあらん 宮沢鵜
の有様東西ハ海まん/\として
南北ハ雲風とたちまち 宮殿より
ふとりの浮橋を立波りまこの神の釉
さりハ心とこの手風もあり了ハ新
し代の時津風治まる八波の声

十終

風乃声富民もうるほふ万歳とう
たふ雲乃声千秋乃秋津嶋治
まれる世こそ久しけれ

橋弁慶

シテ 是ハ西塔乃かたハらに住武蔵坊
弁慶にて候我宿願乃子細あつて
五条乃天神へ丑の時まいりを仕
候ゝ今日満参にて候ほとに只今参ら
はやと存候いかに誰かある　トモ 御前に候
シテ 五条乃天神へ参らむとまうつへく候

ごとく心へ候へ　畏て候いかに申上候

昨日五条の橋を通り候所に

十二三計成おさなき者小太刀にて

切てまはり候はさながら蝶鳥のごとく

なる由申候ほどに今夜の御物詣は

思召止り候へかしと存候　言

語道断の事を申者かな縦ひ天魔

鬼神なりとも大勢にハ叶まじけれ

おとこやうたかりしものいそぎて

しまるかへきにはなれきも敵をとるなれは

よみつけける　二十日過ぐる月のみるも

みるん弁慶は衰寄の思儀成も御出に生

けあみよもをうちまかせ御身をさらし

さぞ都あるらしと申勢を待ほどの

されなるしきて寄なあはれなる者ハ
ひそかにはしと夜をこめ思ひまゐらせね
てこそや弁慶ほどの者ならば
あけ母の命あるに夜更の五条の橋よ
行化生のものを平げんと夕べほと
なく暮るゝ雲のかげをまち替
てはやきまくるまる夜も過しとは

扨も牛若ハ母の仰の
おもきまゝ明ばあすハ寺へのぼるへし
こよひばかりの名残なれハ五条の橋よ
立出て河浪の月をながめんと
待つとゆふなみの気色ハそれか夜
あれはへほとさハ秋の初
面白の気色やなやうやうふけゆくそら

たれ行々浪をうちかへさつゝ内
乃だゝ良の宿の夕五条の橋にたちし
板をとゞろかすとみえし音
を静まりかへる夜ぞ更けてゆく
ねたりし、もそこにてのあかし明
ひかしの山たかみ鐘をまちしめの雲乃
ぎりよりやく月の夜よぎすさる鐘

くわりんの袂にて威したる大ぬかひき
もりあすてきりしはぞとよりり好
むし大長刀横し中取てうちかつぎゆう
もろくとせさき有様いかなるしま鬼
神ありともおそしたとへきやうた
身しかとも我すなるもの頼もしくて
ぞさみるさき乃とひしあよ門の方

こそや更くる橋乃面に通ふらん
あけさこそごう何まこげはやまる
シテ
弁慶かくとは白波乃立ちより渡る橋
板をとゞろとあらゝかにふみならし
牛若
牛若かれを見るよりもすはやう
れしや人来ると薄衣猶引きかつき
うかゞひつゝ寄りそひてあれば
シテ
弁慶これを見付けつゝ言葉をかけんとせし
が思ひたゞみれば女乃姿なり我は出家
乃身なればたゞ目を見ずして行
牛若
すれちがひさまにたちかへり
うしろより長刀のえもとをとうと蹴
あつとおどろき シテ しれものよ物見せんと
上
長刀やがて取直しいつてかゝるの

見てを山手あらに打と切つてかゝれば牛若
うかゞひをしばしひて入門に立寄つゝく身をかはす
夜討のものども悉く太刀抜き持て
あれはくはつとへたる長刀ぬきかざし
きつ太刀打つてうちせつめはひらりひらりとたゞく
りひとりの行かまへてらきんで手をならし半
名よれごろてらゝしかなたへさらかねく

らは太刀よりもをれなぎあなをせなく
たしきよ所二三間さつて引きて持
けしからぬきおあらしと何ま狙乃
く小性ひらりときまはらく手あらに
いつくへと名ひそかいとも刀をはあつくみれ
さりのへちむかしよみちらくちやうやを
きれぐとまうしけるそ右み退ちよ

あらもの〳〵しあれなる人の、ひとりあかり
て足をためて中に小(?)をかゝへて地
おつとりのべて大長刀うちかたげあとさ
きもしらずあまりにおもひとりかぎり
さても〳〵手なれをとも(?)なしかな(?)
なくて弁慶は、ざいさかへ(?)かく
あきれはてゝそ立たりける かうきや

御身誰ぞ風情はいとけなき姿にに(?)く
かほどまでふるまひしはなにものなる
今はなにをかつゝむべき
我こそは源の牛若 義朝の御子なり
シテ
扨汝は 西塔の武蔵弁慶ありけに
名乗合て降参申し御弟子(?)にあまりか
大(?)の御力我等は出家なれとも(?)

あなさいそしがき主あまき後のこしおかり
辛忍よやおかしめぐらし去あかうじ是
又二世の機縁のたゞしめどもよりは主
従子と契約堅く申はらさ哀なりう
せなり弁慶も長刀打かつぎ先登
乃御前へ参りまれ

護法

口手向
是ハ北山三熊野の客僧にて候
我此度松嶋平泉へ乃心ざし
有により御勝諸乃為に本宮證
誠殿に通夜申てしもあらに
霊夢を蒙て候此奥へ下らへ宇得
まつ陸奥名取の里に着ざらうま

所の女さへ年久しき座ありし彼岸
まつかけしうは時も年経てし
うらも今は年たけ行歩もかなはず
またし来る事もかりし杜思ひ
是なる女を便よと添ひさよ家
おめる枕をみる鏡は桜にて
さびの寺ありし是をも持ちて ゆく今

陸奥へと急ぎ候
雲水の行方も遠
き東路よけふ思ひ立旅衣袖も
篠懸の露むすぶ草の枕のかずかずに
信夫の里をよそに見て陸奥のけふの里
に着きにけり　急ぐ程に陸奥の
けふの里に着きて候此所みな名所なり
所の者の古へを尋ねばやと思ひ候

てんば所乃人の御りんか　仕事
を御まねきて　此所よりひらかはば
女と申人の山住より　さらむはは社
所をあまたにくしたる所よりば是よ
御熊野を勧請申させて毎日御
参をうばきまかさいまるし御まいりありしが
是と是へは玉まへ瑞出待て気

みさくあかやさなをきへ　あらうわやさ
ら良是は待やはて了いかくにを
・・・・・・・・・・・・・・・・
おかめの神な座より末代ながまでの
乃むじ心の御　是の陸奥よりひらかの
巻女さちに年々つき巫みとらの　かき
いよきまかれしはりりも此生の縁も
や深ぐあらむ神よたにいかさてかけまく

を悉しと神事くへぱ陰よ光を添
洩らしぞあかくさめ代のかしまうで
遠きさも近き頼をかけれ　ハかまことし
次第よ年おもひて遠きあゆこもかれ
あれ見え　かの三熊野の御代勧請の
おもてさわるきの國むろの
こほりやをとなし乃かは翔きらぬちれ

ふかくたのむ心を真かるうへいよいよ
ゑらく陸奥の名ぞく名とりの代の川名
けらん代をあしけらんと名のつきを陰がふ代
乃代まうけの神はこの證誠殿と申なす
陰く年まうして日おもうでよあゆみを
きこゆしせうかのりをかりかる宮柱
立居陰はまる宮仕のくいまかし

さすか人に尋申へき事の候何事にて
候そ承及たる名所の老女
か申候ハ山けるかみえて候かさん
候是社名所の老女にて御座候へ
とも何乃為に御尋にて候是ハ三熊
野より出たる客僧にて候か老女に
御目にかゝりのためし上度事の候

那智御山へまいりて候ひしに不
て候に老女へ申候是ハ三熊野よ
り出たる山伏乃御身にて御目に
かゝりたき由を仰られ候荒おそろし
よろこばしやことさらへと申にてことに入
出候へ御熊野よりの客僧ハ
まことに入て候是にて候とやらん

卒忽なる掟によりて思ひ立ぬれども
妄想やみがたくて申侍りし為なり梅毛
我此度松島ひらき候ふへの志し右
よろしく御酬恩の為にお宮澄滅
殿に面謁申ての上はかならず御霊
遥々と豪てのぼ洪奥へ下らんと存候ま下
陸奥へおもむき里までおもむき参

然らく年久しき亜ありがたきわらくさか
むかし時は年ありてきしらたゞ今は
年あはれ行歩もかなはで伝は衆多事
去おもしゆかしく社思へ参せ候の外
憐みにのあらばよ遠て妥さしめ抛
てみましは申ざの北筆に出くし乃口寄あ
里がた軽く思召しめされく故ゆく

忝かりて是を照らし 有かくて
中々にきえぞいきろ世もとひ松の露の
命のまゝうつゝか利事おもひたおも
事み仏菩薩の大悲眼をもって出る日の
ゑ字のしるしまつぞ見れて たうとな
遊ハさりけん 何ハいつとも さもあ申
ひて何と悪るひの御寺へ道をて

年もやうく老よりて思ひをさろよ
我とも忘れし 何と申すも道よと申 年
も急ゆく老よりにかすか日せつせよ
かゝうも忘れし 今はとて御成仏も
みゆくきて一世の罪をもつたて
御ゆくやまいをねらへ 仏のとく
おほせしもうなへ 私卜作思ひまたがりたか

めくも拝み奉る 二世の御ちかひや
三所の御山をぞ つゞいて神まつりし
あらたくまのいちはやくいづれの行の
おこなひをもし うきうれん林 高きくらゐ
思ひもよらせよ 神を守りましとい
右額やくぎやうやまひとしなまする
神の御をまゐらせらひもなきの御まり

その昔当山や こゝに宮僧へ
もとの神も三熊野をも勧請して給
まうへやこゝの御信とろ 御
此の御山の有様とあらた宮
にかしまつりよせて本宮證誠
殿と申あまねく世にしるしたる
あまねく世の里新宮といふしまつり給ふ

よしあるよ瀧乃音もせきかへりて
ひまなき権現ぞたゞしきあらはれの嶋
やまとの國のあめのした　ちはやぶる神の前
國家をまもり給ひ其数かぎりなく　民をめぐみ
當社乃御本地をよくもとめて　るてひさ
つらねきたり　そもそも摩伽陀國の
あらはれて御代を治め國家をまもる

月宮大悲の海ふかうして萬民を縁の
御歌をうたひて日月の暇なき
まつり申せの法会の御結
縁あまねきためのあし乃やまと
まつりしやうしやうかながらあきつ神
やまとの國やむろの数
仁宮ありて清き佐馬乃あめのした

さよ心ありしがらめる道と成しより
四海をまもる擁みちくハ天塵をまもり
中にをも本宮や證誠殿と申ハ本地ハ
陀みちくまし海をハ十方界に示現し
てびろり廟遍き御ちかひ頼もしくや
ほとゝすきし陸奥のちかの國の奥
よりも南のかたへ歩みて後よハ

西方の堂よりとかたをまもる大悲
擁護の霞ぞ熊野山の嵐に吹れ
ひさに霊験殊の神明ハたとへ
門前川の流ハ万象の峯の松の
葉をも世の坂路もそむいて陸奥
乃名より又老女がくすりうけし猿
申神ある宮に信あき徳ありや首

如し有りかたきそめてたの也
なれ　奉安へ作りなしめらく宝祚
意ふく御前よ随时代幣帛を
けきて神慮をもて志め御ゆへ
宮々随時乃御心をもてけきて神
慮をもて志めしまう物うをなみても
いそく随时乃幣帛をさゝきも神慮

をもて志め乃ありしを　あ乃みも神や
志ゆしゆ苑　神まつりを指たるとこ
謹上再拝御祈いさもとふみも代八り
乃御耳をてみり喜く利生の趣をも
飛へ菩界の宮に翔りてハ天泰平
國土安全法人快楽福寿圓滿のめ
ゑらえ代遍くほとこし給へや南無

ワキ
いかに老女 誠に老女の御事にて候へ 老女の御事にて候はゞ かりそめの御参詣とも 老女の御姿を見せ給へ

三所権現ごほう善神 息災や
老女うけたまはりたる 老女のうへよきを
志ある人 虚空にかぎり 老女が身
つとめて 寿ひつかへる人まで 命
まぞ事を見るや 権現の御
うひこ 善神よ 有難やまの
あまり成御さまかな 神なきまよう

地
なをひたすらに 人を神の恵にて守る
ゆたかにて まつりたまへれ
ごあはれみ深くおもひ 仏よ下向
乃道より 国と云もとなる
ごたう人をのこし 悪魔をも
所をまもりのごとく せんせんなり
上
善人のり国を守ると申をこそ

護法

ぶ神なりて指おろし給その程こと
志よりに大日如来のあらはれましまし給
しかも大日乃たいと号しらく胎
金剛部は密教なり あまたの御手は
されども日本は一たいのやうきに
ゆゑに両権現とあらはれ給ふ衆生
済度乃方便をめぐらしてみあらはれ

いとおほくはちすの波をわきらく
煩悩のあかをすすげは水はまてくみ
ちをつらつてあやうきうきもののけ
をもちいれも志らこもゆゑやけちや
母乃波ろうちにみすれざはくされ
けられをもちまでもえ門もかも
にいく神慮乃道はとをし年はふり

われらが此老女が孫よりいとをし。
二世の契りは二世の前に結ばざりく
是非成親の志したるよりつ弟
志らせらる志てさくあらたまりげ
しら粉てこれなかりせ給けり

放家僧

巳小序
かやうに候者ハ下野国の住人まきのゝ左
衛門何某が子に小次郎と申者にて候扨も
親にて候者ハ相模国の住人とねの信俊と
申者と口論し不会ならず討れて候親の敵
なれバ討度候へ共敵ハ猛勢なり
我ハ唯一人なる間思ひながら甲斐なく

月日を送らんより見にて候者ハ幼少より出家
ハおもひもよらぬ事にて会下に住便もなく候
同宿共に学文をも談合をもいたしなんハいうに
業にハ勤して遊ひにて候て異ゝ気
召て候 居ハ山方へ参り候へ母ハとも
何の為に来り給ひて候 ありしハ召今
しまうか人をまゝ機にいたし候我々か親の歎の

子共いまた母にへ候へハ歎きの擣我等か申候
一人ある子にて候程に思ひに申まかせ月日を
送り候是非法にまかせ立入候 給
尤に候へ去なから我らか幼少より出家の
身にて候へハ殊に更いらぬ事にて候 同意ハ
去るにて候へハ親の歎をもうけねは不孝
の由まうし候 扨母親の歎をうけて孝に候

ハうさるゝそれハ中にも唐土の李広なりや
かりける母を悪虎にとられたる敵をとらんと
とて百日まで伏野辺に出てねらひける
夕暮に虎と見れハ松乃木陰に虎に似たる大石
のありしを敵虎と思ひつゝ弓矢をはなちけれハ
よつひいて放つ此矢則いしにたちたる忽血
流れけるとかやこれも孝の心深きゆへなり

ぞかしされハ石にも矢の立と申也人ハ只思ひに立々
シテ「是ハ面白き事を聞物かなさらハ
法をも思ひたちをおきて　地「御尋候へハ
シテ「梅枝を皮付にして御手に　地「某も
宗参出しけるとすれハ此法ハ人入数々の御法
家にも御符に某ハ放家にあつて候ハ
放下僧に御成候へハ禅法によりたる由

上 ゆかしく禅法ハいかやうなるらん シテ 実
是ハ面白き御尋にて候是ハ禅を思ひ立
はするものにて候 ツレ 尤にて候 シテ いかさまさうかと思
ふ行脚の姿にてやあるらん ツレ 神を嫌く
思ひの放家の姿にて出きたり シテ 何とてすこ
くと立つ候 上 古郷の名残をさそはれ
有明のつきもまたなかなかにあらたまる

限り見守ハ神拝てや影しく ワキ 上 岩
をそこみ神道やうく隔の垣頼まし
ワキ詞 是ハ相撲の国の住人利根の信俊と申者にて候
われこゝに彼をつきハ見かへりも猶よ
御戸開れ三鳴へてあらやと遊ふ シテサシ 面白の
神の有様やな僧俗ならつ道を離れ
姿とにて候 ツレ 其振舞を隠す家

と思ひ捨しハあさいかや　起てもねても
迷ひあへ　落花一葉の暮てもあすの白雲
青山にはほのとろ　流水山上の秋あって
紅葉てあうあ錦あり　春郭の嵐夕の雨に
げにも明日の音をもいさ露のむしの数
定めあらぬ世の古に　見し水のうかたわれき
いまだんとあるに思ひの外の　めでたよ

申ものいふならハ行とや申さん　シテ浮雲流
水と申也　ワキ又あまきあるへのなをとハ行とや申
シテ何そ風雲流水と申也　ワキいや其ハ浮雲
あまた成者ハ流水のあし　シテ又あれハ此方の
出家の字せてハ行とや申ぞ　シテいやとうしやう
此ハ放下のきぶたるとはや申ぞへ　ワキいうた
面白こそ雷上ほうやれん　シテ歌ワキ　なかなか

門のかゝるとかや。千手の珠数を手に纏ひ
忍辱二体の衣を着て罪障懺悔の袈裟
を掛て社僧とは申されど。是般の出立に得
たり。よく見れば拄杖は団にてありけり。
団の一句承らん。シテ上哥 夫団と申は動く時は
清風を生じ。静まる時は明月を顕はし。明月清
風は同性の内よりあらはれ法法をさらぬ所作

上哥 さて心空なる方便にて。持たる道
理ありがたや。されば今の弓の事 団の一句
面白やなど一天下を守る弓矢を常に給ふも古僧
の道をまもらん。上カ 夫弓と申は上は鳥兎
の姿を像り。日月を家に頭し浄穢不二
の秘法を表す。これ深き深き神通
の弓なり方便の矢を取りまうて四魔の

軍を破り給ふ。されば神も是にまかせ給ふぞかし

て。ひとへに弓を先として討ち治めけり

去る程に天下をとり治まりて四海しづかに

なりぬれば是れも弓のちからぞかし　ワキ詞 抑放家

僧は何れの祖師禅法を御傳へ候ぞ　シテ詞 それ

の宗体を申すは教外別

傳にして云も言れず説も説れず言句に

出せば教に落ち文字を立つれば宗体に背く

背くたゞ一葉のひるがへる風の行方を御覧ぜよ

窺ひまゐらせ候　ワキ詞 面白の法の修行や

如何なるか仏法の心　シテ上 入るとは聞けども

心動じて出ては二三昧の門にあそぶ　ワキ詞 白所

仏は柏にて　シテ 白雲深き所に入て龍驪

生死まちまちなり　輪廻の苦　ワキ 生死

ちるかきハ　シテ詞　たづねきし山のすゑ　ワキ詞　梅がかもする
乃一河をいふた　切りたんだんだんぞあるは
シテ　禅法のきりぞさんとあるは禅法乃
そもそもおけるこゝあるさるとろふ
上音　何と只今よりてでの山まで岩間にて色
まこと南無三寶ゆわれ人のこころや
シテサシ　禅ハ大小の根機をきらハず持戒破
戒をえらばず有無乃二偏にあずからず
悉皆成仏とあるときハなをあり　シテ上　かゝる故
下　かゝる草木も發心乃姿として柳ハ緑
花ハ紅其色々とあらはれけり
名　ウ　青陽乃春の朝ハ谷乃戸出る鶯の
ごつまをまゐる瀧をけあめく雪きれの声
うらたよりおもひやりする蛙乃声きけハ

山乃あらしに月よりも秋に風ふきて
萩の葉そよく門乃田面におつる鴈
あさく稲妻の雲のゆくへの時雨妻てい
うかさこそれはすむ月も山まてそ
指をりて思ひありつゆふの湊の
釣舟ハ通ふなく釜をまいらすると尺
つきとまる村雨の嵐か谷の拝

ゆふへの煙朝のそら消果し界ならむ
乃ちらほらとありとこゝろめごころ寺
らりふへや月のなかにうつる雲居
なをもこゝろやゆかしさ面白の花の都
や筆にかくとも及はし東には祇園清水
ようてくるお瀧も音羽の嵐に
地主の桜はちりちり西は法輪嵯峨の御寺

の御寺まはらばまはれ水車のりん
せんきの川なみ川柳は水にもまるゝ
しだりやなぎは風にもまるゝふくら
すゞめは竹にもまるゝ都の牛は車に
もまるゝ茶うすはひきゝにもまるゝ
げにまことわすれたりとよこき
りこは放家にもまるゝこきりこの二つの

竹のよゝを重てうちおさまりたる代
これハかの乃こゝろ何とも知らずしてかけとゞめ
ずいぶんまつりて思ひのかくさ
あらまより此年月のうらみをはれ
まちえて面にあふひかれまいりて
討ふりきれかくて兄弟の本意をとげ
こきりこの有難くかへらせ親のかう

きしやうの事も孝行のためにゆくよしを
仏神まいりうるあけるよし右をもまいり
かゝるめきやと

鐘引

男 是ハ江州園城寺の住僧にて候扨
も當寺の鐘餘りにちいさく候ほどに
今日集会をいたし鐘を大きに鋳させ
ばやと存候
ヨガヒ いかに申上候藤太秀郷
の方より當寺へ御使の御座候
男 何と秀郷の方より御使の有と申か

△河の流を汲むとも絶えず久し△　甲「何く
畏て上は猶も秀郷かたじけなくも龍
宮に趣き累代の百足虫を平けし
其勲功に十種の贈物ありける中にも此
おもひは此梵鐘なりけるを思ふ人
の為とて衆人菩提の為にとて三井
寺は鐘を園城寺へ寄進申されき

なり其後龍宮より秀郷へつけし龍神
に法味を奉り給ひぬれば数ある人
寺にならせ給ひつきあるまじにて候
口「先は秀郷卿寄進されたる大切の鐘
を撞くまじくと申て往古の目に見えし寺
鐘を撞く極まされたる天晴秀郷の
卿人のとかく　甲「いやく秀郷と申

仁義五常乱れぬ名将なりと揃へし跡有
殊更に八歳の龍女は釈尊に宝珠
を捧げしより南方無垢の成等正覚を
あらはし例あるべき有難やたのもしや
蛇身につきても是やまた法味のちから
乗むかしも我曠劫の始より
求法の為に至れば五衰かぎりの海

に生るる蛇虫の身なから藻にすむ虫の我ら
見ゆるは是 不思議やなあら是ぞ
出されたる者のみ身を現し姿は正しく人間なり
五衰三熱の苦しみを逃れむ声ききて
ゆるさやいかなる者ぞ名をなのれ
是は此浦にすむ竜神なり鐘を施
入の為に道を逃れ出されたるなり

ワキ詞 ふしぎや抑ハ秀郷乃 シテ 俤ちかうし
ワキ かゝるの 上 まことに今も世にひゞく
下 不思議なるく鯨つき給ふや
クリ 夫たぐひなき鐘といへば十二因縁を表し十
二律乃響あり夜昼乃刻限を告げ
すぐ生死の迷悟をひらくとかや シテサシ 然るに
此鐘ハ祇園精舎乃北面に掛し鐘

なるを 玄奘三蔵渡天乃後 龍神
法楽乃そのために流沙河に沈め給ひ
しを守護して今に至るなり 去程に
此海乃龍神に献じをなし鉄蜈蚣あり
しかりける時秀郷勢田乃橋を通り
に大蛇と化してゆきむかひ秀郷を頼みしかは
ときとく弓取乃矢前にかゝり鬼に献せを

こゝに秀郷其名は末代に隠れましよも
あゝ時に竜神秀郷に報の宝
を贈りし中にも妙なるは此鐘ぞ法の
ちからによりゆへ此寺に施入まします
数の宝を給ひとゆへの風に声たてゝ
おぼろきし海づらに行くと見し沖
津浪みだち隠れましよりに浪間に

かくれ失ぬかぎりと〳〵　不思議や扨は秀郷
の昔なりけるかねその深きまことの
あし云楽の声其契約を〳〵
志とは法味を奉らんと侍ければ秘蔵は
ぐわきおもほく思へ　一拝つゝき
あつさの空の凡情也の雲むへた
ちらく湖の浪も勧揺せり　志賀

辛崎乃海つらてぐ立くれ志ら波の
ぐ人よりあがる鐘を守護し
龍王頭より出れハ竜枝の小龍まで追乃
悪竜ハ為とくゝくらひ出ヤ鐘
乃纒ぐ己れ作さいもつけひくとそ
みえしかほとなくあらちれぐ波や
ご三井寺の鐘楼ようつうちまれある

星めぐり寺乃鐘乃娑竭羅竜王も
時ぶっく波つき鐘の音を出らし元
其の冥闇を晴らして東方ふ出す
て鐘をつきハ諸行無常の響を出し
極文南方ハ是生滅法西方へ向ハ
生滅を已北方よ向ヘハ寂滅為楽
作きハこれ音ハ耳そともゐしやん則

菩提に至り佛法興隆伽藍繁昌
に守らんと誓竜一度に頭を傾き禮
をなさせ給ひ悲しくとめぐり雲に竜
神の眷属を引連れて立帰る浪の
ちかまく水ようさあつさざなみく水よ
沈みてぞ龍宮にそ入り給ふ

右之本者觀世左夫織部
以章句真本今永新令改
版者也
寛政十一己未歳弥生
天保十一庚子歳孟春改正再板
皇都二條通御幸町西入町
山本長兵衛